

九州産業考古学会報

第29号 2019年10月20日発行 発行元：九州産業考古学会

産業考古学会全国大会開催地・中間市よりご挨拶

下山要（実行委員長／「なかもガイドの会」会長）



今回、産業考古学会主催の全国大会を中間市で開催する運びとなりました。全国から多数の方々に参加されますことに深く感謝の意を表します。誠に有難う御座います。実行委員の一人として、この大会盛会裏に開催されることを強く望んでいます。

中間市は、かつて石炭産業の発展と共に栄えた町でしたが、昭和の後半から人口も減少し、鉱害復旧事業が中心でした。同時に住宅都市への団地造

成等で北九州近郊ベッドタウンとして俄に再発展を遂げている現状です。そのような静かな町に突然、世界遺産登録の話が浮上いたしました。市内にある八幡製鐵所の遠賀川水源地ポンプ室が平成27年の世界遺産登録構成資産の一部に組み込まれたからです。「明治日本の産業革命遺産—製鉄・製鋼、造船、石炭産業—」は2015（平成27）年7月に世界文化遺産に正式に登録されました。全国23箇所ある構成資産のうち、八幡製鐵所の4か所の施設のひとつとして、遠賀川水源地ポンプ室が選ばれました。これによって中間市は大きく変わりました。「世界遺産のある中間市」となり、登録後はかつてない活況を呈しており、近郊の自治体や住民、国内の遠方からも多くの方々が見学に来られています。

私達ガイドのメンバーは、来客の方々に親切丁寧をモットーに心を込めて説明や案内を行っています。中間市には「歴史ある神社仏閣」や福岡藩の藩主が狩猟に来た時の別荘「御茶屋」跡や黒田長政が栗山大膳に命じ造り始め完成まで141年かかった人工運河の「堀川」、また西日本唯一の「屋根のない博物館」などがあります。

登録と同時に取り組み始めたイギリス発祥の「フットパス」などに多くの市民が参加し数々の歴史や文化が薫る遺跡があることに気付くようになり、関心も高まっています。

このような中間市であります、一人でも多くの方々に中間市の良さや世界遺産のある市を認識して頂き足を運んで下されば幸に存じます。

最後になりましたが、今後共に産業考古学会のご発展と会員の皆様のご活躍を衷心からご祈念申し上げます。

【報告】

「ヨーロッパ技術史の旅」から帰って

木元富夫（顧問）

今夏、小生久々にヨーロッパに出向き、イギリス・ドイツの産業遺産を見て廻ることが出来た。中部産業遺産研究会の石田正治氏が企画された「ヨーロッパ技術史の旅」（8月14日～9月2日）に加えてもらったことである。毎年のように調査に出掛けておられる石田氏が綿密に立案された、二十日近くに及ぶ行程は多事かつ濃密で、古稀を過ぎた老生など、さしたる故障もなく福岡空港に無事帰還できたことを喜び感謝したものである。

宿泊地は、イギリスはロンドン、ブリストル、ダービー、ドイツはエッセン、ゴスラー、フランクフルトで（現地解散後、石田氏ら3名はさらにベルリン、ワルシャワへ）、各地を鉄道で移動し、そこを拠点にレンタカーで周辺を見て廻るといふもの。一行は英・独全行程参加者が老生を含めて6名、前半イギリスのみが4名、後半ドイツのみが3名であった。訪れた事跡は数多く、一々の説明は割愛し、印象的感想をいくつか述べておこう。

韓国インチョン空港を経てロンドンに到着したら、まずイエローカードなる市内鉄道パスを買って、それでホテルまで来るようにと言われていたが、これがうまく買えない。人込みの中の緊張感もあって、購入手順の説明画面がよく読めないのだ。鉄道に限らず空港でもチェックインはもちろん荷物預けまでがIT化＝セルフサービス化されているのには閉口した。

現地でのドライブにはナビが活用されたが、ドライバーが持参したスマホを車にセットしたら、実に細かい案内がそれも日本語で出てきたのにはこれまた驚いた。スマホがあれば見知らぬレストランでもすんな

り行けることを実地に見せられて、運転免許もケータイも持たないまま定年を迎えた老生など、デジタルデバイドの広がりや改めて実感したことであった。ロンドンの市内観光をする暇は殆んどなかったが、それでも垣間見た中心部の様子は高層ビルが（不調和に）林立して15年前と大きく変わっていた。新自由主義的再開発と近年の政治的混乱に何か関係があるのだろうか。

イギリスからドイツへは飛行機で渡ったが、個人的希望を言えばユーロトンネルを初体験したいところだった。交通事情も昔と変わっている。最終日近く、自由時間があつたのでケルンまで観光に行った。老生が持参したガイドブック（1990年版）によれば、ケルンまで「IC特急でフランクフルトから約2時間20分」とあつたが、農地や丘陵を走り抜けて何と65分で着いたではないか。思うに30年前IC（新幹線）は部分開通で、今は全線専用路線となって高速化している。頭の中の古い地図を修正しなければならない。帰路はライン川に沿った在来線の特急に乗って、時間はかかったが天候もよく素晴らしい景色を堪能できた。



写真：ケルン大聖堂（撮影・市原猛志）

産業遺産を見た感想を一つだけ。ドイツではオリバー・マイヤー氏（愛知教育大学教授）という最高のガイドを得た御蔭で、特に氏が生まれ育ったルール工業地帯では縦横に探訪したが、中でも感じ入ったのはドルトムント=エムス運河の閘門施設を見たことである。19世紀の新興工業国ドイツの問題点は、ルールの水運を担うライン川の出入り口がオランダに扼されていることで、他国を経ずに、直接北海に繋がる水路を開くことが悲願であった。その思いが国家的事業としてこの巨大な閘門式運河を造ったのである。石の壁に彫られた国章の鷲とヴィルヘルム2世の名が入った銘標をみて、ドイツ帝国時代のルールの地政学的意義を考えたことである。なお世界遺産化された産業遺産はどれもオープンで、その歴

史的価値が多くの人々に喜ばれていた。イギリスの紡績工場跡とドイツの製鉄所跡で結婚式が行なわれていたのに遭遇したことも印象深い。



写真: Henrichenburg boatlift Dortmund-Ems-Kanal (撮影・市原猛志)



【報告】

第43回ユネスコ世界遺産委員会参加報告

市原猛志（会員・事務局）

ここ10年における産業遺産という用語の知名度向上に一番貢献したのは、ユネスコの世界文化遺産制度であったといえよう。この世界遺産に「石見銀山」や「明治日本の産業革命遺産」をはじめとした各種産業遺産が登録された結果、産業遺産は一部の研究者ともの好きがわざわざ見に行くところから、一般観光客の目的地へと様変わりしていった。筆者はこの世界遺産委員会に昨年度から参加し、世界各地の産業遺産保全状況や登録の過程を拝聴している。今年の世界遺産委員会は、2019年6月30日から7月10日までの会期で旧ソビエト連邦構成国のひとつ、アゼルバイジャン共和国

の首都バクー市にて開催され、今年の日本の推薦案件である百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録をはじめとして主に前半部分の審議を伺うことができた。ここでは昨年と比較した今委員会の意義について報告する。

福岡空港からアゼルバイジャン共和国の玄関口であるハイダル・アリエフ空港までは、乗り継ぎを含めておおよそ丸1日かかる。前日入りし、バクー市内で世界遺産に登録されたシルヴァンシャー宮殿と乙女の塔を見学の後、倒れるように睡眠をとると、バクーコンベンションセンターでの登録手続きを経て、隣接施設であるハイダル・アリエフセンターにてオープングレセプション

ンに参加した。この建物は幻の国立競技場案の設計者で日本でも有名になった故ザハ・ハディドの設計による物件で、曲面を多用したポストモダン建築として知られる。ここでは合唱と雅楽による歓迎を受け、翌7月1日から具体的な議事が進行された。



写真:ヘイダル・アリエフセンター

会議初日は前回委員会の報告や財政報告などが中心で、2日目から4日目にかけて登録された遺産の保全状況に関しての議論、新規世界遺産の登録にかかる審議は7月5日からの3日間行われた。この間に百舌鳥・古市の古墳群が35候補中15番目の審議事項として世界遺産に登録されたことはご存じの方も多いかと思う。

世界遺産の審議手続きにかかる手順については細かな説明を省かせていただくとして、今委員会における特徴的な部分について述べたい。昨年度までの世界遺産委員会で相次いだ諮問機関による勧告を逆転させる形での世界遺産登録を問題視した各委員国によって、今回はより科学的分析に基づいた世界遺産の登録方針が確認された。結果として議事そのものはスムーズに進行していき、候補ひとつの審査にかかる時間は大幅に短縮された。それでも地元アゼルバイジャンのシェキハーン宮殿など不記載勧告からの逆転登録事例はあったが、登録に

かかる問題点の改善を目指したことは大きな進歩といえよう。

また今回はアフリカ大陸諸国による会場パネル展示やサイドイベントとしてのシンポジウムが相次いだ。これはここ数年アフリカ諸国が世界遺産委員会の自国内開催を求め、再来年2021年の委員会をウガンダが招請している旨最終報告に記載されるまでになったことも主因と思われるが、それを差し引いても参加者や世界遺産委員会自体がアフリカの遺産保全に関する単独審議事項を設けるなどしてアフリカの遺産に注目し、またアフリカ各国もそれに応えるべくユネスコと協働して世界遺産・世界遺産候補の保全に取り組む方針がそこかしこに見られた。

世界遺産会期の昼休み時間及び夕方時間にはサイドイベントとして各種のシンポジウムが開催されるが、ここでは世界遺産を取り巻く持続可能型観光開発に関する事例が多くみられた。この流れは昨年の世界遺産委員会関連イベントで報告された、イタリアを中心として国際的なネットワークとして展開されている“Life Beyond Tourism”という概念などに見られたが、今年はさらに顕著な傾向となった。観光客が地域住民の環境を脅かしつつあるという、観光地が抱える共通の問題点への改善策を世界の専門家間で解決しようという潮流は、かなり大きなものとなりつつある。

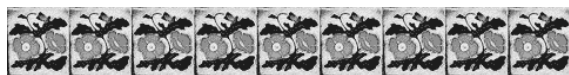
世界遺産委員会は、会議そのものとしては政府間外交の舞台のひとつであり、また開催地にとっては自国の魅力を伝える絶好の舞台である。実際にアゼルバイジャンのバクー市街ではユネスコ関係者向けに博物館を開放し、またクラフトマンシップフェスティバルが催されるなど、町全体がお祭りのような状態であった。

今回の委員会に参加した方々の中には国際産業遺産保存委員会(TICCIH)会長であ

るオグリソープ氏をはじめとして、各国の代表として理事が多数集結していた。これは産業遺産の分野に限った話ではない。自然遺産や文化遺産それぞれの学術的な価値を明らかにすべく、世界遺産委員会は各分野の専門家たちが結集する「知のつぼ」ともいえる。その会議の場を通じて今後の文化施策の在り方、各種遺産の保存手法など多くの情報を交換することができる。このような場に参加できる機会を、この分野に関心を持つより多くの方々と共有できればと思えてならない。



写真:バクーコンベンションセンター内部



【追悼】

深町純亮氏を偲ぶ

木元富夫（顧問）

2019年5月、筑豊の名物男、深町純亮氏が永眠された。享年93、「最期は眠るように息を引き取」られたとのことである。深町氏には九州産業考古学会も何かと御世話になり、また教えて頂いた。ここに改めて感謝の意を表するものである。

飯塚にフカマチあり、およそ筑豊の歴史や産業に興味を持つ者で、その令名を知ら

ない者はないが、略歴の一端を紹介しよう。深町氏は九州帝国大学法学部を卒業して飯塚市の麻生鋳業に入社し、本社幹部や麻生病院事務長などを歴任された。退職後は飯塚市歴史資料館館長を務めるかたわら、筑豊炭坑遺跡研究会事務局長として筑豊石炭産業史の調査・研究を差配された。『炭坑節物語』や『筑豊の石炭王 伊藤伝右衛門』など著書も多い。また各地で行なわれた名調子の講演は数知れない。

小生私的に回想するに、旧伊藤伝右衛門邸の保存が実現したのは、一に氏の熱意によるものである。同邸は石炭王のみならず、「筑紫の女王」白蓮がらみの、正に筑豊地方文化の象徴的記念物であったが20世紀末、ボタ山が緑に覆われる時世になって大邸宅は持て余し者となり、屋敷は壊滅の危殆に瀕したのである。小生が九州産業考古学会の会長時代のことであった。そこで小会も状況を産業考古学会に報告するとともに、同邸の産業文化史的意義を考証、評価した資料を持参して、その保存と活用を飯塚市長に陳情した。小会の保存運動は深町氏の周到なシナリオの一部に便乗させてもらったに過ぎないが、それでもやっと保存の方針が出されたときには、氏から御礼の言葉を頂戴して大いに恐縮した。その後も氏と会えばこの時のことが口の端に上ることが多く、その度に氏の郷土愛の深さを感じ入ったものである。

2012年9月に飯塚で、「長弘雄次先生・深町純亮先生 米寿祝賀会」が開かれた(両氏は筑豊産業史研究の盟友で、長弘氏は筑豊近代遺産研究会会長を務め、『筑豊の近代化遺産』を刊行している、またこの祝賀会の様子はkias会報第19号に報告がある)。その席上で深町氏は、「筑豊を愛する心は私の中に染み付いている。余命ある限り、地域の良さを語り伝えたい。」と熱弁を振るい、後進に多大の感銘を与えたことであ

った。老いてなお盛んな深町氏は諸論考を「筑豊学」として集大成することを期していたが、それには時間が足りなかったようである。御冥福をお祈りする。



写真：2010年総会・津屋崎での深町純亮氏



【お知らせ】

産業考古学会 2019年度全国大会 (中間市大会) 詳細

産業考古学会の2019年度全国大会について、研究発表大会及び見学会の詳細が決まりましたので、改めてお知らせいたします。皆様のご来訪をお待ち申し上げます。

(プレッシャー申込は締切りました)

研究発表大会：11月9日 9:30～17:00

会場：なかもハーモニーホール会議室
(福岡県中間市蓮花寺3丁目7-1)

09:50～11:40 研究発表1

- 種田明「バルクアカデミー・フライベルクの教育「産業考古学」2009・2019」
- 前田達男「幕末佐賀藩における反射炉の改良記録—築地から多布施へ—」
- 佐滝剛弘「蚕糸関連産業遺産ネットワークの拡がり～「富岡製糸場と絹産業

遺産群」世界遺産登録5周年、今後の課題と展望～」

伊東孝・高橋深雪「産業遺産の永遠なる継続性のための施策提案—新潟県柏崎市の「草生水まつり」を事例にして—」

12:00～13:00 昼食

(希望者は中鶴炭鉱慰郷碑見学)

13:00～14:00 基調講演「熊本地震における産業遺産の被害と復旧状況」(仮題)
中田浩毅(熊本産業遺産委員会前事務局長)

14:10～14:30 「中間堰調査報告」

吉田浩之学芸員(中間市教育委員会)

14:30～16:20 研究発表2

加藤敬之「戦前の鈴鹿海軍航空隊から占領期の鈴鹿電気通信学園の設立へ—軍都鈴鹿から戦後の電気通信技術者を育成する中心地への転換—」

谷矢満隆「北九州市の火葬場遺構に関する実測調査」

阪東峻一「戦前期の福岡市における郊外住宅の形成と現状」

石田真弥、中山俊介「煉瓦造建造物の補修方法に関する一考察 煉瓦転用補修の可能性」

16:20～16:50 科研費中間報告「鉄鉱滓煉瓦研究の現状と課題」市原猛志

17:30～ 懇親会(八仙閣中間店)

見学会：11月10日 09:00～15:00

集合場所：9:00 中間市歴史民俗資料館

見学地：遠賀堀川運河をフットパスにて
散策～直方市石炭記念館・旧救護訓練所模擬坑道～筑豊高等学校資料室

見学会参加希望の会員は、下記アドレスまでメールにてご連絡ください。研究発表大会は参加無料(資料代2000円)です。

(2019nakama@sangyo-koukogaku.net)

【報告】

旧大牟田市庁舎本館に関する要望書

2019年9月6日付けで、大牟田市長宛下のような要望書を提出した。以下、内容を転載する。

福岡県大牟田市長 中尾昌弘様

九州産業考古学会 会長 大石道義

大牟田市庁舎本館に関する要望書

標記の件につきまして、真摯な対処をしていただきたく、下記の通り要望します。

記

1 要望の趣旨

大牟田市庁舎本館は、国登録有形文化財として歴史的・文化的価値を有する建築物であり、まちのシンボルとして景観形成にも大きく寄与しています。新市庁舎整備にあたっては、この本館の価値を損なうことなく、引き続き市庁舎本館の再利用を基本に据えて、検討を進めていただきたい。

2 要望の理由

① 市庁舎本館の学術的価値

市庁舎本館は、建設された1936（昭和11）年以降、地震・火災・風水害等の影響を受けることも無く、太平洋戦争の戦禍からも免れて、威風堂々としたその姿を八十数年にわたって保持してきました。更に、市による本館調査報告書と登録同意書を踏まえ、「国土の歴史的景観に寄与している」として、2005（平成17）年12月に「大牟田市役所本庁舎旧館」という名称で、国の登録有形文化財に登録されました。もちろん、本館は今なお何らの支障もなく市庁舎として日々利用されています。

市庁舎本館の規模と内容は、建築当時としては全国の県庁舎に匹敵しています。全国に残る同時代の類似官庁建築物は、すべて庁舎や図書館などとして利活用されています。

② 市の文化財行政に対する疑義

建物はいったん壊すと元に戻すことはできません。ところが、文化財登録後わずか十数年しか経っていないにも関わらず、大牟田市は「大牟田市庁舎整備に関する基本方針（案）」の中で、この本館を解体し跡地に新庁舎を建設しようとしています。

これまで大牟田市は、福岡県内で先駆的に市文化財保護条例を制定し、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」につながる、石炭関連の近代化遺産の調査や保存にも積極的に取り組んでこられました。その大牟田市が、良好に残っている国登録有形文化財さえ自らの手で破壊しようというのは暴挙以外の何ものでもなく、市の歴史、市のアイデンティティの喪失であり、全国の自治体に悪しき先例を晒すこととなります。まさに地方自治体の責務である「文化財の保存と活用」、つまり文化財保護行政を放棄するもので極めて遺憾であります。

③ 市庁舎本館の整備手法

市庁舎整備に関しては、国やほかの自治体でも採用されている「耐震補強工事」さえ実施すれば、この本館は安全な市庁舎として引き続き利用し続けることが十分可能です。国登録有形文化財が重要文化財よりも現状変更の規制が緩やかなのは、解体を容易ならしめるためではなく、むしろ利活用をしやすくして建物を保存するためなのです。もちろん、建物内部の改修や新たなエレベーターの取り付けなども可能です。

後世に悔いを残すことが無いよう、大牟田市長の大いなる度量と明晰なる判断を期待しております。

◇◇会報原稿募集（会員外でも応募できます！）◇◇

『九州産業考古学会報』への積極的な投稿をお願いします。募集原稿は【報告】（700字～1400字程度）や【研究発表】（1400～2800字程度）、【お知らせ】（400字以内）など。いずれも図表を入れる場合文字数要調整。また紙面の都合上、文面レイアウトに関して編集側で変更する場合があります。投稿に関する詳しい情報は学会ウェブサイト及び事務局まで。

■■会報第29号・目次■■

【巻頭言】	【お知らせ】
産業考古学会全国大会開催地・中間市 よりご挨拶 …………… 下山要 1	産業考古学会 2019 年度全国大会 (中間市大会) 詳細 …………… 6
【報告】	【報告】
「ヨーロッパ技術史の旅」から帰って …………… 木元富夫 2	旧大牟田市庁舎本館に関する要望書 …… 7
第43回ユネスコ世界遺産委員会参加報告 …………… 市原猛志 3	【お知らせ】
【追悼】	今後の予定 …………… 8
深町純亮氏を偲ぶ …………… 木元富夫 5	会費納入・ご寄付のお願い …………… 8

今後の予定		会費納入・ご寄付のお願い
10月25 ～28日	全国石炭産業関連博物館等 研修交流会(釧路)	当会は年会費を個人会員 2000 円、団体会員は 5000 円をそれぞれ徴収しています。当会の趣旨をご理解頂き、会費納入或いはご寄付の程、どうぞ宜しくお願いいたします。 会費納入・寄付先口座(一覧) ・ゆうちょ銀行 17430-88882241 キュウシュウサンギョウコウコガツカイ ・福岡銀行大牟田支店(店番 691) 普通 1914369 九州産業考古学会
11月 8～10日	産業考古学会全国大会(中間市大会)なかもハーモニーホール他	
11月 23日	佐々木享没後 5 周年記念シンポジウム(名古屋大学)	
12月 14日	産業考古学会評議員総会(大阪予定)	
20/1月		

<編集後記>

11月開催の全国大会に向けて、種々準備が進みつつある。産業遺産研究も世代交代の流れがあり、12年前の参加者で今回ご参加いただけない方々もある一方で、30代の参加や研究発表も予定されている。この会報に関しても世代交代を渴望しているのだが、これに関しては10年ほど前から期待しつつ難しい状況が続いている。拙著『産業遺産巡礼(日本編)』の販売状況は順調で、北海道から沖縄県まで多くの図書館でも納入されているようだ。図書館や書店での「出会い」を通じ、できるだけ多くの方々に産業遺産の魅力を伝える一助となればと思っている。(市原)

九州産業考古学会事務局 〒811-3430 福岡県宗像市平井二丁目12-1 砂場一明 気付
 TEL&FAX : 0940-36-5501 E-mail : k-sunaba@jcom.home.ne.jp URL : http://kias.kilo.jp/index.php
 学会ML希望者は、上記アドレスもしくは Web 担当者 (iota_titanus@yahoo.co.jp) まで連絡願います。